

公益財団法人 住宅リフォーム・ 紛争処理支援センター 理事長賞

タイトル 連島の家

タイプ 持家一戸建

構造 在来木造

所在地 岡山県倉敷市
築後年数 35 年
施工期間 40 日間
該当工事面積 40.58 m²
総工事床面積 93.90 m²
該当部分工事費 850 万円
総工事費 1,100 万円
居住者構成 15 歳以上 65 歳未満：2 人
設計会社 塚本雅久建築設計事務所
担当者：塚本 雅久
施工会社 (株) 松建グループ
担当者：重光 和夫

⑤



①



A



B



C



④



⑥



⑦

■リフォームの動機／設計・施工の工夫点／施主の感想・満足度／住宅の価値を向上させた内容など

施主が定年退職を迎えて、新たな生活の一歩として生活の主要スペースの改修と住宅設備の刷新をするとの事であった。昔ながらの小さく分かれた暗いダイニングとキッチンとを1室と統合し、水廻りの位置変更をする事で光溢れるLDKとなり、浴室・洗面脱衣室とも十分なスペースを確保できた。プラン変更に伴い構造を現況に最適な状況で補強しながらも傾斜天井により顕在化する既存構造を空間に取り入れ、新旧の材料で新たな空間を構成した。

夫婦2人暮らしで主要生活スペースはこのLDK+水廻りで就寝以外の生活の完結性があり、内部建具ではあるが、導入を意識させる格子戸、ホール部へ繋がるガラス框戸、旧スペースと一線を画する舞良戸という関係性を意識した構成とした。壁は自然素材塗壁、床は杉フローリングの採用で質感が向上し、明るく天井の高低差による構成を気に入っていただいている。

■性能向上の特性

耐震性能、耐久性能、温熱性能

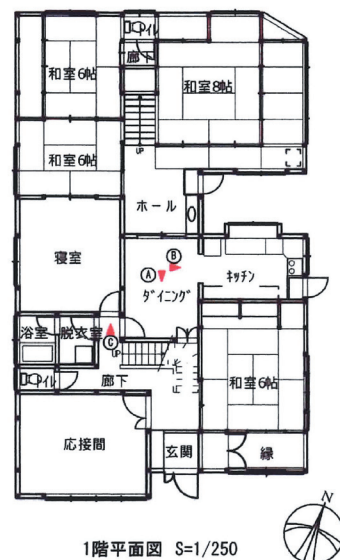
■特に配慮した事項

構造補強（筋交、構造用合板）・住宅設備機器の刷新・断熱材施工・断熱サッシ設置

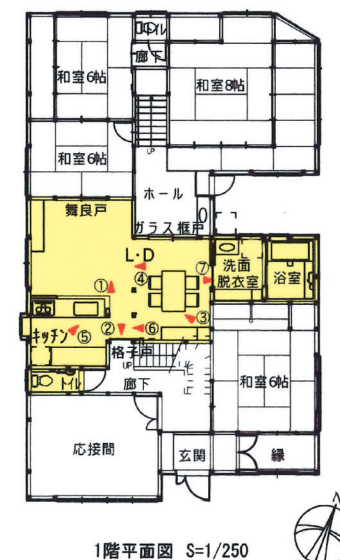


③

【リフォーム前】



【リフォーム後】



リフォーム部位： 居室 台所 浴室 便所 洗面所 廊下 階段 玄関 エクステリア マンション共用部分

■ 講 評

小規模で派手さは全くないが、素直でバランスの良い作品である。特に、リフォームらしい「部分性能向上」と意匠とを折り合わせ、清新な空間にまとめあげている点が素晴らしい。

室内は、注意深く設けられた窓と、壁・天井の一体的な白さにより、静かな明るさで満たされている。北側で既存空間と接することになった2本の建具（舞良戸と框戸）は、居間側を広く感じさせるように溶け込んでいる。インテリアが隅々まで程良い緊張感を持つ要因は、まずこうしたデザインの丁寧な積み重ねにある。

審査に訪れた日は猛暑であったが、居間へ入った時の空気感や湿度感は一言では説明しにくいほど快適であった。単に風の抜けが良いとか断熱性の向上といった面だけではなく、空間のスケール感や光の回り方までもがその温熱感に影響を与えているように感じられた。断熱エリアは限られているが、普段はこの部屋だけで過ごすことも多いので気にならないという施主の言は、リフォームでの性能向上はもっと柔軟に捉えても良いことを教えてくれるようである。

また本住戸は、南側半分が旧耐震基準で建てられ、昭和56年以降に北側を増築（新耐震）したものである。中央の水回り部分のみが平屋であるため、耐震面では気を使うところになるが、既存部分に手を入れる必要は生じなかったため、基礎も含めた部分補強にとどめている。構造上外すことができなかった柱は、プランや動線に巧みに組込まれている。この柱や露出梁は、逆にインテリアを程良く分節し、スケール感も調整している。既存部分の横架材で丈を抑えられた建具が、開放感の強い格子

戸とともに、空間にアクセントを与えている。

建具枠回りは既存材や塗装が異なる材が重なり、意匠的に破綻しやすい箇所であるが、使用材や扉の種類を丁寧に選んでいるので違和感がない。敷居の床段差も微妙に擦り付け調整されているので、足元を意識しないで自然に通過できる。自然だから、どこにいても居心地が良く、疲れない。

新築では不十分と見られがちで、こうした「部分性能向上」の扱い方が、空間の意匠とバランス良く溶け合っているのである。この清々しさは応募用紙からは読み取りにくいだが、現地を訪れて実感できた。設計者の意図を具現化した施工者の力量も十分に感じられる。

新たにおかれた家具類や椅子は、施主側で特注し用意したもののだが、この空間のスケール感に見事に合致しており、「空間への無意識の敬意」が伺えた。

通常、小規模の間取り替えリフォームレベルでは、設計事務所は敬遠されがちである。しかし本件では、単純な間取り替えのレベルを越えて、新旧空間が巧みに織り混ざる「気持ち良い空間」が紡ぎ出されており、設計事務所が係ったゆえの明らかな質の高さが感じられる。既存部分を今後二世帯化するなど改変する可能性もあるのだが、施主は疑うことなく設計者へ相談されるであろう。

「（設計事務所は）考える量が違う」と言う設計者の自負は頼もしい。そして文句なく、かつ、さり気なく証明されている。本コンクールの王道とも言える内容で、公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター理事長賞に相応しい作品と判断した。

